夏合宿

―青年は草むらをめざす―

三浦　洋嗣

「ビューン」「ガタガタガタン」凸凹道を一台の赤い自転車がとばす。眼前に迫る右カーブ。車上の青年は何かに憑かれたように直進する。青年は車上で腰を浮かせた。そして草むらをめざした。

僕はクラブの仲間七人と北海道へ合宿に来ていた。七日前に上川を出発して八月四日、知床半島のウトロにやってきていた。

ウトロに着いて、キャンプ場にテントを張り、フロントバッグひとつで仲間たちは魔の知床五湖へ向かった。曇り空からはいまにも雨つぶが落ちてきそうだった。痛みさっていた僕はいやいやながら出かけた。

もちろん道は舗装してあるはずもなく、のぼりの道を無言でペダルを踏み続けた。足は半分死んでいた。何何　いや何十倍ぐらい疲ったろうか　道はゆるやかな下りになり、死にかけた足はしばしの休息を得ていた。そして僕は　あの恐怖の直線コースへ入っていった。かなり長い下り坂。前方には　小島、古木がいた。彼の心にはムラムラと野望がわいてきた。小島　古木たちをこの直線で抜き去ろうという野望が。

僕は完全に、競輪選手というよりも自動車レーサーになりきっていた。頭の中に瞬時にして計画ができる。――――このカタカタ道では当然前の車はブレーキをかけて下っていく。そこを

ーブレーキでギリギリまで行って直線で抜き去ってコーナーをクリアできる――！！！ 僕の目には華麗な走行ライン コーナリングの曲線が鮮明に映っていた。

「ガタガタガタガタン、ガタガタガタガタン」凸凹道を自転車はとびはねるようにスピードを増し下っていた。ハンドルを握る手に汗がにじむ。予想どおり前の車は減速している。小鳥を抜くそして古木に並び抜き去る。驚きの声 「ブレーンがぜた。」という声が耳に入る。僕の心には「ヤッタ」という叫び声があがる。

ところが、ところがである。凸凹道をとびはねて下ってきた自転車、ブレーキをかけることができない。かけようものならはじきとばされるだろう。眼前に迫る右カーブ、しかもアウト側には砂が盛ってある。そこですべって転倒するわけにはいかない。

その時、僕の脳裏を二十日ほど前の予備合宿でのことがかすめた。その時僕は予備合宿でドの右カーブを曲がりきれなかったのだ。ガードレールの間隙をぬい、道をとび出し転倒し、坂をすべり落ちていくこの自我が自転車を必死にひっぱり上げるという離れ業(?)をやっていた、そして今また！

僕はカーブに突入した。その瞬間から、僕は頭の中に描いた華麗な自転車曲線に別れを告げた。そう、自転車は直進した。わずかに減速しながら。目の前にひろがる草むら。腰を浮かせた。そして自転車もろとも突込んだ。「ザザザー」。突込み転倒すると同時に僕は自転車から降りて

いた。両手でハンドルをしっかりと握っていた。
自転車はハンドルを中心に四分の一回転して止
まった。一瞬の静寂の後、僕は立ち上がり自転
車を引っぱり上げる。けがはないようだ。どこ
もそう痛くない。「おいおい大丈夫かよ」という
うち木に「ああ平気だ」と答えて、僕はこんな
ドジを二度もやった恥しさと、テレ臭さからい
とり車を押して前へ進んだ。ハンドルはコンニ
チハとおじぎをしていたが、それを直さず、何
ともないことを装っていた。後から来た人の「
何、三角がまたやっただけ」と言う声が聞こえ
みんなが集まって現場検証を行なっていた。僕
は恥しさからコンニチハのハンドルの自転車に
またがり一人先に進んで行った。
これでこの日最大のeveントは終わりを告
げるかと思われたが、そうではなかった。

事故後の僕は慎重すぎた。何事もなくこの
知床五湖大到着。僕はさっそくハンドルをみん
なの知らないうちに直し、やれやれと光を緩め
うと思いボトルに手をかけようとしてなな
ない。ボトルが消えている。さっきの所で
取りに戻らしい。しかたなく帰りにさがそう
と思いつつ人がと知床五湖をまわった。ところ
がそれがまったくの誤算だった。知床五湖とは
ぶにふさわしい。早々にしてあげてきた。そし
て帰り道、ボトルの捜索をした。捜索は難航し
たが、結局ささやかれていたのだった。
これで魔の知床五湖の話は終わる。実にひど
いところ。これから人のすく自転車にせいとも

抵さんして行かせなければ。

最後に、初めての夏合宿の全体的な感想を述べようと思う。

後は昨年からもし大学に入れたら一年の夏休みには北海道へ行きたいと思っていた。その希望を実現することができてとてもうれしい。北海道はやはり北海道だった。よかった。中でも一番印象に残っているのは、サロマ湖で見た星空だ。星が降ってきたという表現を初めて実感として理解できた。天の川がはっきり見え、東京では、どこに星座があるのかと必死にさがさねばならないのに、そこでは「あれ、あれが北斗七星、あれがW座」とすぐわかる。よごれた空を見て「星座を考えた昔の人は何と想像力が豊かなんだ」と思うのがまちがいであることをあの星空は教えてくれた。

場所や景色だけではない。合宿の生活の中でもいろいろなことを知り、考えた。毎日の食事で生存競争の厳しさを。狭いテントにぎっしりあたった夜の寝袋の中で人生の厳しさを。そしていちばん大きなものは、先輩たち また同じ一年生たちの暖かい心に触れることができたことだ。サイクリング部に入ってほんとうによかったと思った。

また来年の合宿も、先輩たち そして同輩後輩たちと楽しい合宿をしたいと思う。事故のないように。

FIN